

182-196)。

最後に本書を読んだ書評者の感想を付け加えるならば、①新しい様相概念が14世紀のスコトゥスやオッカム達によって発展し体系化され、②その様相理論は現代の可能世界論ときわめて類似したアイデアを持ち、③それは、〈全知全能の神は多くの可能な選択肢から選択して世界を創造した〉という神学上の議論の影響を受けて成立したものであるという Knuuttila の主張は明快であり、興味深い。このような様相概念についての研究はおそらく、単に論理学だけでなく、スコトゥスやオッカムの哲学全体を理解するための重要な鍵になるであろう。Knuuttila が参考文献として挙げている André Goddu, *The Physics of William of Ockham* (Studien und Texte zur Geistesgeschichte des Mittelalters 16, Köln, Brill, 1984), Martin Kusch, 'Natural Necessity in William of Ockham' (in *Knowledge and the Science in Medieval Philosophy. Proceeding of the Eighth International Congress of Medieval Philosophy II*, Helsinki pp. 231-239, 1990), Douglas C. Langston, 'Scotus and Possible Worlds' (in *Knowledge and the Science in Medieval Philosophy*. pp. 240-247, 1990) といった著作や論文は、スコトゥスやオッカムの様相概念についての研究から、彼等の存在論や倫理学全体の解明へと向かう研究の方向を顕著に示している。

坂口ふみ著

『〈個〉の誕生 キリスト教教理をつくった人びと』

岩波書店, 1996年, xiii+302頁.

谷 隆 一 郎

本書が主として扱っているのは、東方・ギリシア教父の伝統におけるキリスト教教理、とくに神の子の受肉、イエス・キリストの神人性ないしヒュポスタシスの結合という教理の形成と展開の歴史である。だが著者はその複雑な経緯を、大方の教理史の枠組を遙かに越えて、古代ギリシア哲学以来の「一と多」、「分離と混合」といったアポリアをめぐる探究の動向と対比させつつ、ヒュポスタシス——それは本書ではあえ

て〈個〉と訳されているが——把握に収斂してゆく教理の哲学的意味を洞察し、ひいてはそこに近・現代の個や人格という概念の、「まだ意識に還元されきってはいない」がゆえに、みずみずしく生命にあふれた原型を見ているのである。この意味で本書は、西洋の思想史全体の位置づけという点でも、人間・個の真の誕生に関わる中心的位相の把握という点でも、まことに豊かな可能性と問題提起を孕んだ本格的でしかも稀有な書物だと言うことができよう。

著者によれば、教義の問題は西欧の歴史の「いわば鬼子」として、一般の哲学史などでは多分に疎外されてきたが、「ヨーロッパ思想史において、この黙過され無視されてきた〔ビザンツ〕数百年の思想努力ほど画期的であざやかで重大なものはなかった」という。それは「イエスが単純な《隣人の愛》ということばで語ったこと」、つまり「古代の理想に旗をひるがえす、世界（現実）に対する新しい基本的態度」に、「普遍的で透明なかたちを与えようとする努力にはかならず」、古代ギリシア的遺産に対するそうした拮抗・受容・超克のただ中から、「古典古代の価値観の反映である古典古代的存在論にかわるべきキリスト教的存在論」が形成されていったのである。その内実は、たとえばニュッサのグレゴリオスの神秘哲学的かつ修道的作品などに顕著に見られるように、基本的にはすでに四世紀、カッパドキアの教父たちにおいて最も豊かな表現に達していたと考えられる。が、他方、本来は修道的生そのものと密接に連関している教理の、より整合的な定式を模索してゆくことは後代の人々の手に委ねられたのだ。そこに正統と異端入り乱れての険しい論争過程が生じたが、その核となったのがヒュポスタシス（ペルソナ）という概念ならぬ概念にはかならない。それは「単なるギリシア的個体存在ではなく、おきかえのきかない純粹個者、しかもつねに他者との交流（関係性）のうちにあることを本質とする単独者だ」という。そして著者はかかるヒュポスタシス概念のうちに、「キリスト教思想がギリシア的思想世界に対して突きつけた〔あらたな〕独立宣言のようなもの」を読み取っているのである。

さて、言うまでもなくニカイア信経以来の定式として、イエス・キリストは父なる神と同一実体なる神であり、また同時に全く人間であるとされた。なぜなら、「贖罪による救いが全人類を救う最大のものであるためには贖いとして殺される者が神に等しくなければならず」、しかも「その受苦と死が単に見せかけではなく真正のものであるためには、彼は全く人でなければならぬ」からである。このように、イエス・

キリストが「全く神、全く人」だという信を保持しつつ、しかもそれを「理論的に説明すべく」、つとにオリゲネス、アポリナリス、アタナシウス、そしてカッパドキアの教父たち等々による探究が為された。そしてその後、歴史上一つの結節点となったのが、カルケドン信経の定式である。それが成立するに至った複雑な背景については本書に詳しいが、その基礎となったのは、当時の大立物キュリルスのネストリウス宛て第二書簡（ネストリウス論駁の基本文書）と、教皇レオのフラヴィアヌス宛て書簡であり、総じてこの信経は「いわばレオ書簡のキュリルス用語による翻訳という性格が濃い」と評されもする。ともあれその中心部分は、同一の主なるキリストが、神性と人間性という二つの本性（ビュシス）において、「融合せず、変化せず、分割せず、分離せず存在し」、しかも「一つのヒュポスタシスへと共合している」というものであった。ちなみに先のキュリルスの書簡では、よりはっきりと「ヒュポスタシスに関して（即して）の結合」という表現が用いられている。

ところで大勢としてはそれ以後、神性と人間性が主キリストにおいて「ヒュポスタシス的に結合し」、キリストなるヒュポスタシスが現に誕生・顕現してくる、という把握が正統として定着してゆくとしてよい。ただ実際には、とくに当の「ヒュポスタシス結合」や、ビュシスとヒュポスタシスの関わりなどの理解をめぐる、なおも一世紀におよぶ論争が展開されることになるのである。しかしその錯綜した論争の過程は、単に特殊な教理史内での内輪もめに留まるものであったのではなくて、著者のいみじくも強調するごとく、プラトンの『ソピステース』などの問題を何らか継承した「存在論的な分離と混合（または結合）」という主題と格闘するものであった。こうした視点から著者は、プラトン、アリストテレスからストア派、ネオプラトニズムに至るさまざまな「混合論」を精査しつつ、それらとの緊張した対比のもとで歴代のキリスト教的混合論の意味するところを極めてあざやかに見定めてゆく。その結果、「新しい存在論の完成形」としてとりわけ注目されるのが、「ビザンツ」と「エルサレム」という二人のレオンチウスのヒュポスタシス論にはかならない。

そこでまず、両レオンチウスに共通の把握として別出されているのが、「ビュシス（ないしウーシア）とヒュポスタシスの切断」、つまり「ヒュポスタシスという《個としての個》存在概念の、その他の存在をあらゆる概念からの分離独立」ということであった。ヒュポスタシスはまた、「ウーシアやビュシスのもつような一切の規定を持たない純粹の個の動性、存在性」とも看做されている。著者によれば、キリスト教

の真髄たる「神への愛と隣人への愛」にあって、「愛のめざすものはいつもの、かけがえのない単独者としての単独者であり」、そこにこそ、「個としての個」という、古典的ギリシア的思考の射程内では自己矛盾でしかない概念の誕生してくるゆえんが存するのである。

両レオンチウスのヒュポスタシス論はそれぞれに特徴ある精緻なものであり、解釈のむづかしい点も少なくないが、いま本書の見事な論究に即して基本線のみ取り出すとすれば、「ビザンツ」では「キリストが単なる人でも神でもない新たな全体と考えられ」、「エルサレム」では「キリストはあくまで神であって、それが人性を吸収併合する」という「観点の差」が存する。つまり「ビザンツ」では、「いわば神人の本性的またヒュポスタシス的諸特性が集まって一つのヒュポスタシスを決定することがより強調され」、「エルサレム」では、「ロゴス・ヒュポスタシスが人性をも、またその特性をもつくり出し、併せもつという、基体であるヒュポスタシスの能動性がより強調されることになる」という。換言すれば、「エルサレム」では「ビザンツ」よりむしろ簡明に、「先在ロゴスのヒュポスタシスがただ一つのよりどころとされ」、そうしたロゴスのヒュポスタシスは、「受肉のあとでは、それぞれのヒュシスの端的な特性が、ロゴスのヒュポスタシスのうちでより多なる特性へと積み重ねられることによって」、「より総合的」になるのだ。

大略こうした方向での教理の集大成は、いわば「ギリシア形而上学の枠組を受けつぎながら、その内部からそれを修正し、〔隣人との、イエスとの真実の出会いによる〕新しい直観にかたちを与える仕事であった。」著者はそこに、現在に至るまでヨーロッパの思想的営みが突き動かされている源泉を見て、それを「ビザンツ的インパクト」と呼んでいる。というのも、ヘブライとギリシアの両伝統の交錯するビザンツ初期の歴史的状况の中でこそ、キリスト教は自らを、「普遍に対抗する個」、「本質に対抗する存在」の思想として形づくりえたからである。そしてその中心に現存するキリスト・ヒュポスタシスなる存在こそは、「この世界と絶対者が〔自己を失わずに差異と区別を保ちつづけながら〕一つに結合する場所であり、絶対者が自らを世界のために失うところであり、逆に世界が自らを失って絶対者に参与するところでもある」と望見されているのである。……

以上は、本書の奥行き深く豊かな内容を僅かに跡づけたものに過ぎないが、次に少しく感想ないし問いを記し、よき対話・探究のための一助としたい。(1) エルサレム

のレオンチウスも言うように、「個的なビュシス（人間性など）はそれ自体で前以て存立しえず、先在するロゴス・ヒュポスタシスの存立のうちではじめて存在を得る。」この意味では、真のヒュポスタシス存在たることは現実の我々にとって、それに成りゆくべき究極のものであって、すでに確保されているものではない。だが我々が何らか神性に結合され、神のロゴス・ヒュポスタシスに与る神化の道をゆくのは、恐らく個々の有限な対象・人への、そして畢竟自己への執着が超越的神的な霊の働きによってどこまでも否定され無化されてゆく契機を介して、はじめて生起しうであらう。（この点では、多分に神なき自律を旨とする近代的個とは対極的ですらある。）そのことなくしては自己は自己ですらなく、またロゴス・ヒュポスタシスの現成に共に参与してゆくべき他者・隣人も真実には存在しないのだ。とすれば、本書において、「個としての個への愛」、「個人的で真実なこと、隣人との交わり」が探究の礎ないし場としてとくに重視され、しかもヒュポスタシスがあえて「個」と訳される時、我々はある意味ではじめからキリストの位置に立つことになり、そのため、神化の道行きへと無限に開かれた険しくも切実なダイナミズムが、何か無時間的論理の場に置きかえられる嫌がないであろうか。（2）キリストが「全く神、全く人」たることは、救いのための要請だという。が、キリストを主語とするそうした表現が原初的に語り出される場とは、当の使徒たちの出会いの経験、彼らの信という志向的自己超出的な愛のかたちそのものであろう。つまりキリストの神人性とは、使徒の「信という魂のかたち」、すなわち神化の何らかの萌しの、成立根拠でありかつ究極目的として、ほかならぬその信のかたちそのものの自己認識の道において、志向的に語られえたものではなからうか。それゆえ、「……を信ずる」と、かの信経のはじめにあるのは、当然のことであるように見えて、その実、受肉をめぐる教理なるものが、本来は何らか客体的知の領域のはなしではなく、自他の在ることの根拠に関わる根本的な経験、換言すれば神化へと開かれた「既に、かつ未だ」という緊張したダイナミズムの経験それ自身の、志向的意味の表現であることを示すものであろう。その限りでは、両レオンチウスの論は論理的整合性という点では確かに最も彫琢されたものでありつつも、それはなお多分に両義的な性格を併っているのではなからうか。そして恐らく、教理の理論化（限定）を目指すその論の全体は、東方教父の修道的な伝統の根底に漲る、無限なるものへと徹底的に開かれた「神化」の文脈に再び晒される時には、アリストテリズム導入の功罪という点も含めて、何らか新たな方向づけ・変容を受ける余地

を残しているとも考えられるのである。

岡崎文明著

『プロクロスとトマス・アクィナスにおける善と存在者
——西洋哲学史研究序説——』

晃洋書房, 1993年, xiii+482+16頁.

川 添 信 介

本書は著者岡崎氏の長年にわたるプロクロスを中心とした新プラトン主義研究とトマス・アクィナス研究とを、以下に紹介する概念的枠組みによってまとめあげられたものである。ここには堅固な著者の「観方」が優れて一貫した仕方提示されており、読者に強い印象を与える著作となっている。

さて、本書は短い「緒論」と「あとがき」を別にすれば、「第一部西洋哲学史観」、「第二部各論—プロクロス、『原因論』、トマス・アクィナス、存在の優位性の哲学における悪の問題」それに「結論と展望」と続く構成となっている。本書の特徴の一つはこの「第一部」の存在であろう。ここで著者は自己の研究が単なるモノグラフィーにとどまるのではなく、西洋哲学史全体に一定の視座を設定した上でなされたものであることを表明される。「あとがき」によれば、「哲学は本来「全体」(totum)を探求する「学」である」から、「哲学史の〈全体〉をいかにとらえ理解すればよいか」ということが氏の積年の課題であった。また、課題であるだけでなく、研究の途上にある場合にも、哲学史全体の理解が「探求者の進む方向と目的を絶えず指し示し導いてくれる「灯台」でもある」とされている (p. 478)。だから「結論と展望」において、クザーヌスへの新プラトン主義の影響の問題にまで言及して筆を置いておられる。このような氏の指摘は哲学史の研究者にとっては、当然のこととは言え、つい目前の研究課題に目をふさがれてしまいがちな評者にとっては強烈な警鐘であった。

では、氏が「第一部」で採用する「灯台」であり、「第二部」の各論がそこで展開される「共通の座標空間」(緒論, p. 2) である視座はどのようなものであるのか。それはジルソンの西洋哲学史観である。西洋哲学史の切れ目をギリシア哲学と中世哲学の間に置き、ヘーゲルやヴィンデルバントと違って中世哲学に独自の意味を認める